

あさひの

2026

No.86

TAKE FREE

DXで拓く病院の展望



DXで拓く病院の展望

理事長代理兼統括院長

しみず

はるき

清水 治樹

医療DXとの共生
近年、「医療DX（デジタルトランスフォーメーション）」という言葉が耳にする機会が増えてきました。これは単に機械やシステムを導入することではなく、デジタル技術を活用して医療の在り方そのものをより良い方向へ変えていく取り組みです。当院でも、この医療DXを段階的に進めています。

しかし、私が最も大切にしたいと考えているのは、「効率化そのもの」ではありません。DXによって生まれた時間を、患者さんとのコミュニケーションに充てることです。診察や看護の中

で不安や疑問に丁寧に耳を傾けること、検査結果をわかりやすく説明すること、何気ない会話の中から体調の変化に気づくこと。こうした積み重ねが、安心して医療を受けていただくための土台になると考えています。

医療は本来、人と人が向き合う仕事です。どれほど技術が進歩しても、安心感や信頼関係といった人ならではの温かみは、機械が代替できるものではありません。だからこそ、私たちはあえて効率化を進め、その分の時間と余力を「人に向き合うこと」に使いたいと考えています。



運転シミュレーター

スマートベッドシステムと運転シミュレーターの活用

例えば、当院では「スマートベッドシステム」を導入しています。これはベッド周辺の機器と連動し、患者さんの状態を効率的に記録・管理できる仕組みです。具体的には、体温や血中酸素濃度などを測定した後、床頭台に埋め込まれたモニターに測定機器をかざすだけで、データが自動的に取り込まれます。記録はそのまま電子カルテにも反映されるため、従来必要であった入力作業が大幅に省略されます。これにより入力ミスの防止

にもつながり、スタッフはより患者さんの観察やケアに集中できるようになりました。また、離床や体動の情報も把握できるため、安全管理の面でも大きな効果を発揮しています。

運転に関する評価が必要な患者さんには、運転シミュレーターを活用しています。これは効率化というよりも、評価の「正確さ」と「客観性」を高めるための取り組みです。実際の運転に近い環境で反応速度や判断力を測定し、その結果を数値として可視化することができます。感覚的な判断ではなく、客観的なデータに基づいて説

明ができるため、患者さんご本人やご家族にも納得していただきやすくなります。

さらに、内視鏡検査や画像診断の分野では、AI（人工知能）による補助システムを導入しています。例えば、病変の可能性がある部分を自動で検出し、医師に提示することで、見落としのリスクを低減します。最終的な診断はあくまで医師が責任を持って行いますが、AIという新しい視点加わることで、より精度の高い医療の提供につながっています。

技術の力、人の力

一方で、デジタル化が進むほど重要になるのが「情報の安全性」です。当院では電子カルテのセキュリティ強化にも力を入れていきます。具体的には、職員ごとのアクセス権限の厳格な管理、通信の暗号化、不正アクセスを防ぐための監視体制の整備などを行っています。また、定期的な研修を通じて職員個々人の情報をセキュリテイ意識の向上にも努めています。患者さんの大切な個人情報を守ることは、医療機関としての責務であり、信頼の基盤であると考えています。

医療DXは、決して冷たいものではありません。む

しろ、人の手を離れた作業を機械に任せることで、医療者が人にしかできない役割に集中できるようにするためのものです。業務の効率化と医療の質の向上を両立させることで、結果として患者さんにとってより安心で満足度の高い医療につながっていきます。

私たちはこれからも、技術と人の力をバランスよく活かしながら、地域の皆さまに信頼される医療を提供してまいります。患者さん一人ひとりに寄り添い、丁寧に向き合う時間を大切に。そのための手段として、医療DXを着実に進めていきます。今後とも、安心して受診していただける医療機関を目指しています。

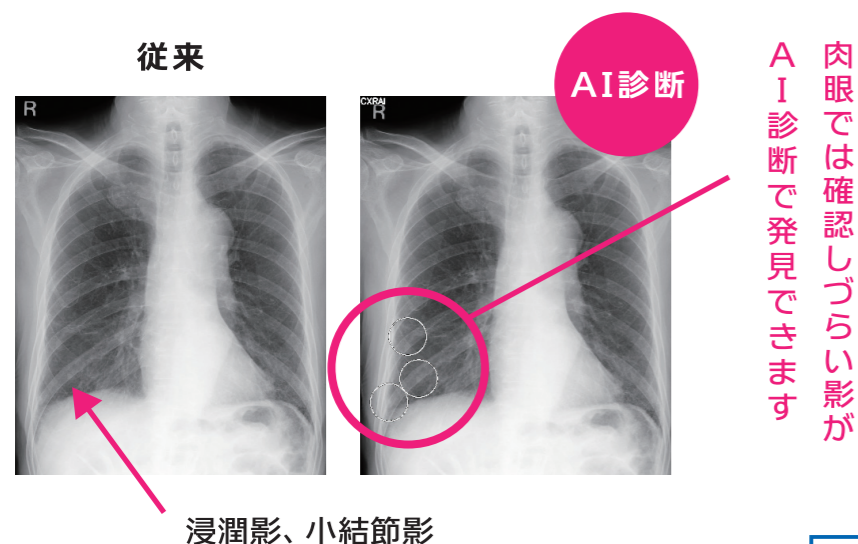


スマートベッドシステム

AIがサポートする胸部X線検査

放射線科 診療放射線技師 栗崎 莉音

当院では、胸部X線検査にAI(人工知能)を活用した診断サポートを導入しています。AIが画像を解析し、異常が疑われる部分を見つけることで、医師の診断を支援します。見落としの防止や診断精度の向上につながり、より安心して検査を受けていただけます。検査の流れや時間はこれまでと変わりません。



内視鏡画像診断支援システム

健診センター 看護師 相馬 真琴

健診センターでは、胃内視鏡(胃カメラ)検査にAIが導入されています。AIは、検査医と同時に画像を観察し、人の目では見逃してしまうようなごく小さな病変を見つけて、早期発見を強力にサポートしてくれます。

病変を疑う領域を検出時に
検出ボックスと報知音でアラートします



CAD状態表示

アイコン	対象部位		観察モード	支援モード
	食道	胃		
	○	×	BLI	食道胃平上気腫疑い領域検出支援モード
	×	○	白色光	胃腫瘍性病変疑い領域検出支援モード
	○	○	LCI	食道胃平上気腫疑い領域検出支援モード 胃腫瘍性病変疑い領域検出支援モード

ビジュアルアシストサークル
内視鏡画像の辺縁部で検出した場合、対象病変の可能性のある領域に近い境界線が点灯します。

検出ボックス
対象病変の可能性のある領域を表示し、検出をサポートします。

報知音
対象病変である可能性のある領域を検出した場合、報知音がなります。

電子カルテシステム

情報システム課 SEリーダー 穴井 克紀

2025年11月に電子カルテシステムを更新しました。新しいシステムでは感染管理システム、透析管理システムなどの部門システムが追加されました。また、スマートフォンやタブレットも活用し医療の質と業務効率の向上に寄与しています。

毎朝、サーバーチェックを行っています



AIとデジタルが支える確かな診断

PTP監査支援システム(Peech)

薬剤部 薬剤師 幸野 洋子

薬局では、みなさまにお渡しする薬のチェックに、機械を導入しています。取り揃えた薬の写真撮影し、薬のバーコードと処方箋の内容を照合させる機械です。薬の種類や数量が間違っていないか等を確認するために使用しています。撮影したデータは後から見返せるように保管しています。

機械を通すことでスピーディーにチェックができます



スマートベッドシステム

看護部 看護師 小川 清美

看護部は、「スマートベッドシステム」導入でバイタル測定後に瞬時に正確な情報が電子カルテに取りこまれベッドサイドモニターで患者さんの情報を確認・共有することができます。「眠りスキャン」はマットレスの下にセンサーを設置し患者さんの体動や睡眠状況をモニターで把握でき、転倒予防や睡眠状況の改善に役立てるなどDXを進めています。



バイタルサインを簡単に
入力することができます



透析機器と電子カルテの連携

臨床工学科 臨床工学技士 主任 内田 耕司

透析機器と電子カルテを連携し、データ入出力を自動化しました。事務作業の効率化で迅速な患者対応が可能となり、臨床工学技士による「スマートな見守り」を実践。ICTの力で、より安心安全な医療を皆さまへ届けます。

透析中の変化をすばやく共有し、安心につながります



自動車運転支援 ～運転支援の新たなカタチ～

訪問リハビリテーションセンター 作業療法士リーダー 里 昇龍



自分で出来る健康管理
理事長代理兼 統括院長
清水 治樹
(脳卒中診療科)

健康を維持するうえで、自分の「体調の指標」を把握しておくことは大切です。とくに、高血圧や高脂血症、糖尿病などの生活習慣病を有されている方は、体温や脈拍、血圧、体重くらいは定期的に測定することをお勧めします。体温計はどのお宅にもあるでしょうから、体調管理のツールとして、体重計と血圧計は出来れば所有していただきたいものです。

BMIという肥満度の指標は、体重(キログラム)を身長(メートル)の二乗で割ることで求められます。例えば身長が158cm、体重60kgの方なら、 $60 \div 1.58 \div 1.58$ でBMIは24になります。18.5〜25未満が「普通体重」です。身長は大きく変わることがないので、体重を落とすことでBMI値が改善します。BMIは血圧、血糖値、脂質値とほぼ関連します。肥満の方が痩せることは大事ですが、当然ながら体重を測定し変化をみないと実感湧かないでしょう。

また、最近の体重計は基礎代謝や筋肉量・脂肪量なども分かるようになってきます。身長を入力すれば、BMIも表示されます。筋肉は脂肪よりも重いので、BMI値は大きいものの、実は適正体重というところもあります。代謝・筋肉・脂肪のデータを基に、身体の若さを年齢で表した「体内年齢」が表示される機種も

身体を健やかに保つための情報を『健身控え帳』として連載しています。気になるポイントは、是非メモして活用ください！



普及しています。これも運動や食事療法の意欲を上げるには推奨できる指標ではないでしょうか。

血圧計に関し、手首で測るタイプより上腕で測定する機種が正確な値が出るようです。測定するタイミングとしては、朝と夕の2回。朝食と夕食の前くらいが良いのではないかと思います。食後や入浴後は正確な値が得られません。大事なことは「普段の血圧」を知っておくこと。頭が痛い時や体調が悪い時だけ測っても、健康評価の指標にはなりません。

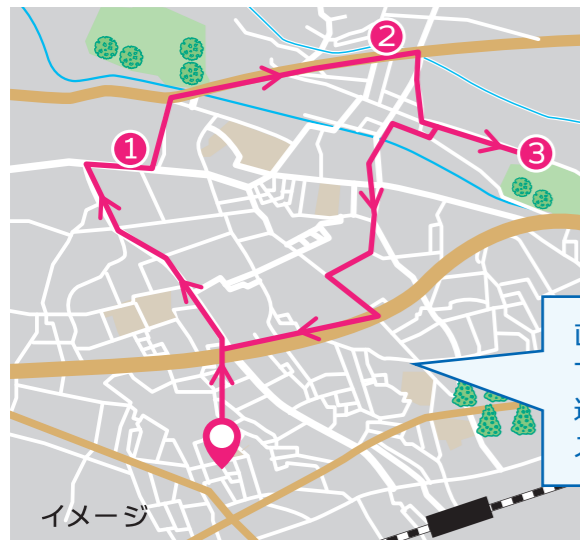
最後に、市販の血圧計は、正確な値を示さない個体も散見します。私の外来では、時に血圧計を持参していただき病院の血圧計と差をみていますが、ほぼ正確くや高めに表示する、が多い印象です。ごく稀に上の血圧で10〜20mmHgほど高く出る場合があります(低く出る血圧計は経験がありません)。あまり指摘されないことですが、自宅で使用している血圧計が正確であるか否かは非常に大事なことです。近年は血圧コントロールの指標として自宅血圧を重視しますが、病院での値と大きく異なる時は、正しい値を示す医療用血圧計と比較してみることが必要だと思っています。

送迎支援システム

通所リハビリテーションセンター 送迎リーダー 加治屋 昌平



送迎支援システム導入で、約150名の利用者さんのご自宅までの効率的なルートと、予想到着時間が携帯端末に表示され、送迎者が運転に集中できるようになりました。



特にお迎え時、熟練者と不慣れなスタッフとの間にあった利用者さんごとに異なる確認事項(服薬確認の漏れ等)が著しく少なくなり、ケアの質の統一化が見られます。

また、施設到着も正確になり、余裕が生まれ、利用者さんに対して、丁寧なケアが提供出来るようになりました。

直前でのルート変更にも対応でき、迷うことはありません。送迎順番が分かりやすくスタッフ間でも好評です！



退院後の生活において「また車を運転できるだろうか」と不安を感じる患者さんは少なくありません。当院では、自動車運転の再開支援の一環として、熊本県内で初めて導入したTOYOTA社製(アイロック社)のドライビングシミュレーターを活用しています。

運転に関する検査を行っております
運転には様々な機能が関わります。身体機能や認知機能を検査し、運転にどのような影響があるかを調べます。



事故の場面も体験できるので安全運転への意識向上に役立ちます！



本シミュレーターでは、実際の道路環境に近い状況を再現しながら、運転操作技能や危険予測・判断力を評価・訓練することが可能です。さらに、運転中の反応時間や操作の傾向などをデータとして可視化することで、患者さん自身が運転特性や課題を客観的に理解できる仕組みとなっています。

これらの評価データは電子カルテ上で一元管理され、リハビリスタッフ間での共有に加え、主治医や関連する専門医とも情報共有を行っています。医師の医学的判断とリハビリテーションの評価を統合することで、

より安全性と根拠に基づいた運転再開支援につなげています。

また、自動車学校とも連携し、実車での評価を組み合わせながら総合的に判断しています。データに基づいた助言や訓練を行うことで、運転再開の可否の検討や、安全な運転につながる支援を行っています。

今後も、デジタル技術と多職種・地域連携を活かしながら、患者さん一人ひとりに応じた移動手段の選択を支える取り組みを進めていきます。運転再開支援について詳しく知りたい方は、作業療法士までお問い合わせください。



患者さんが安心して生活できるよう
移動手段の選択を支える取り組みを続けています。

運転に関してのご相談は、お電話にて「自動車運転について相談」とお申し付けください。HPに掲載している、お問い合わせフォームからお気軽にご連絡いただけます。

【朝日野総合病院】
TEL 096-344-3000(代)
窓口：総合リハビリテーションセンター
(作業療法士)



HP

【理念】

愛する人を安心して任せられる病院の創造



医療法人 朝日野会

朝日野総合病院

〒861-8072 熊本市北区室園町12番10号
TEL 096-344-3000 FAX 096-343-7570

